

支援と支配

—「困難事例」を読み解く補助線

竹端 寛

たけばた ひろし
1975年生まれ
兵庫県立大学環境人間学部准教授
主な著書
『枠組み外しの旅—「個性化」が変える福祉社会』
(青灯社、2012年)
『権利擁護が支援を変える』(現代書館、2013年)
『脱「いい子」のソーシャルワーク』(共著、現代書館、2021年)

はじめに

パウロ・フレイレは私にとって大切なメンターの一人だ。生前の彼にお目にかかったことはないが、著作を通じて沢山のことを学ばせてもらい続けている。二〇一八年には、彼を含む三人を主人公にした書籍『「当たり前」をひっくり返す—バザーリア・ニリエ・フレイレが奏でた「革命」』(現代書館)を出版したくらいだ。教育を

「理解していないのは、あの人たちを理解していないのは、あなたのほうじゃないの、パウロ?」そういつて、エルザはつけ加えた。『あの人たち、あなたの話ほだいたいわかったと思うわ。あの労働者の発言からしても、それは明瞭よ。あなたの話はわかった。でも、あの人たちは、あなたが自分たちを理解することを求めているのよ。それが大問題なのよね』

若かりし時代のフレイレが、ブラジルのある街の貧しい労働者たちに、子どもへの体罰がいかに関心か、を教えていた。その時、フレイレは「教師」として、ピアジェ理論を用いながら体罰の問題性を科学的に説明した。だが、「生徒」である労働者の一人が、フレイレに「反論」する。彼の教授内容に反論したのではない。極貧の生活環境で希望が持てず、「暮らしが厳しくて、もう、どうしようもない」から子どもにも打ち打っているのだ、と訴えかけたのである。

この「生徒」による「反論」はフレイレには堪えた。だが、より核心に迫ったのは、妻エルザによる「あの人たちを理解していないのは、あなたのほうじゃないの、パウロ?」「あの人たちは、あなたが自分たちを理解す

主題にした本誌で執筆依頼をいただいたのも、この本がご縁となった。

そこで、この本で考えたことをご紹介しながら、フレイレを通じて教育と福祉の接点を考えてみたい。

理解していないのは、誰?

フレイレの書籍で私が一番心に響き続けているのは、次のエピソードである。

ることを求めているのよ」という「反論」であった。フレイレは、エリート教師であり、教授内容については理解していた。そして、労働者たちは、おそらくピアジェ理論は知らなかっただろう。その意味では、フレイレは教授内容を理解していて、労働者たちは理解していなかった。だが、「体罰が子どもにどのような影響を及ぼすのか」を教えるフレイレには理解できていないことがあった。それは、体罰をする労働者たちの生活実態や生き様などの社会的背景である。彼らは単なる知識の欠如の故にではなく、むしろ極貧な生活による余裕のなさ故に体罰をしていた。その彼らの生活環境や生きる苦悩が最大化した彼らの社会的背景を理解していない、ということ、を、「生徒」たちから厳しく告発されたのである。

支援と教育の共通性

私も大学で教員をしていて、授業中に学生から反論されたり、こちらの意図とは違う指摘をされた時に、むかつく感情的な反発を抱くことがある。その際、早口で言いくるめようとしたり、強い調子で再反論してしまっ